季刊誌
神奈川芸術劇場

ひらかれた劇場へ。

KAAT PAPER

秋 2023

モノ・人・まちをつくる
創造型劇場KAATの広報紙

特集 貌（かたち）とは、何だろう。

対談「変容する美しさ、多様化する『貌（かたち）』」
資生堂 fibona プロジェクトリーダー 中西裕子 × 長塚圭史

特集「時代をつなぐ、“かたち”を残す。」
写真家 浅田政志

特集「かたちの輪郭、美しさへの犠牲と献身」
人物デザイナー 柘植伊佐夫

●KAATな人の行きつけ　●REVIEW　●長塚圭史の思いつき
●神奈川へ、会いに〈協同組合伊勢佐木町商店街 まちづくり委員会〉
●ただいま、KAAT準備中　●公演スケジュール

対談

資生堂 fibona プロジェクトリーダー　中西裕子 × KAAT神奈川芸術劇場 芸術監督　長塚圭史

変容する美しさ、多様化する「貌（かたち）」

2023年度メインシーズンのタイトルは「貌（かたち）」です。目に見える「かたち」、触れて確かめる「かたち」、聞こえてくる「かたち」とさまざまですが、「美しい」とされる価値観も多種多様です。そこで今回は、人々の美しくありたいという気持ちに向き合ってきた資生堂の「S/PARK（エスパーク）」に伺い、オープンイノベーションプログラムfibona（フィボナ）のプロジェクトリーダー 中西裕子さんと、現在の「美しさ」について語り合いました。

文＝三浦真紀　写真＝後藤洋平

演劇における「見た目」は新しいステージへ。

――KAATの今秋から始まるシーズンのタイトルは「貌（かたち）」です。中西さん、この字を見た印象は？

中西　珍しいなと思いました。調べたら、外観を表す漢字なんですね。もしかしたら外側の見え方を強調されているのかな？ と、受け止めました。

長塚　輪郭という意味も添えて、国のかたち、自分の中の美意識のかたちなど、外から中に入っていく感覚です。実際、演劇は視覚を頼りにするところもありますし、見た目から目を背けることはできません。そこで今回は、資生堂グローバルイノベーションセンター「S/PARK」に伺いました。そもそも、この建物では何を研究しているのですか。

中西　メイクアップのための調色など化粧品をつくることはもちろん、もう一段深い基礎研究にも取り組んでいます。シワやシミが体内のどんなメカニズムで起こるのか、それを改善するには何を塗ったらいいのか、その化粧品を使ったらどんな感触なのか、使用すると人はどんな気持ちになるのかなど、感性や心理の研究まで行っています。そのなかには、どういう見え方をしたら人は美しいと思うのかなども含まれています。

長塚　基本的には研究がメインですか？

中西　はい。同時にとても開いた場所で、1・2階にはカフェやミュージアムがあり、誰でもご利用いただけます。3階には多くの人が集まることのできるホールもあります。ここはKAATと同じように、開かれた研究所をコンセプトにしています。資生堂は日々の暮らしを営む人々にプロダクトを販売することを生業にしているので、研究者も日々、生活している人を見るべきだと。研究者が、直接カウンセリングで悩みを聞き、その方だけのために商品を提供するBeauty Barというサービスもあります。

長塚　中西さんは、ここでどんなお仕事を？

中西　生活者と研究者をつないだり、さまざまな業界の方々とのコラボレーションなどを企画、実行するオープンイノベーションと呼ばれる仕事をしています。以前は、白衣を着て研究をしていました。

長塚　そうなんですね。中西さんはなぜ資生堂の研究者になられたんですか？

中西　大学生の時に、水と油はなぜ混ざるのか、または混ざらないのか、その混ざっている間はどうなっているのかといった研究をしていました。顕微鏡で原子や分子を見ているとものすごくきれいで、それもこの環境なら絶対こうなるというブレない世界。化粧品も水と油などからつくられているので、これを一生やっていけたらと入社しました。実際は、水と油を混ぜて化粧品の処方を設計する仕事です。そのうち、人が心地よいと感じるテクスチャーは何だろう？ と着目しはじめ、見た目で人にとろみを連想させるらしいとか、マニアックな研究を重ねていたら、研究対象を決める部門に異動になったんです。

長塚　研究を決める？

中西　はい。大学の先生たちにお会いして研究の方向性を聞いたり、一般のお宅を訪問してお話を伺ったり。例えば、オーガニックに気を使った食生活をしているご家庭なのに、冷蔵庫の隣にコンビニのお箸がたくさんあるな、とか（笑）。美しくありたいという理想と現実のギャップをリアルに垣間見られて、そこを埋めるものは何だろう？ と考える。そんな研究を企画して、今に至ります。

長塚　面白い。健康食と言いながらも完璧にやっている人はほぼいませんからね。

中西　そうなんです。水と油なら環境が整えば絶対に混ざるのに、人間は考えと行動がずれていたり、わかっていてもやらなかったりする。その人間らしさが魅力なんですよ。

――演劇と似ていますね。人間の内面や矛盾を突く感じ。

長塚　人は本音と建前で生きていますから。普段から人の内にあるものと外に出るものは違うし、対する人によってキャラクターを変えたりもする。演劇では、それをお芝居のなかでつくっていくわけですが。舞台の場合、外貌がきれいであることが物語の大切な要素であることもあります。例えばギリシャ神話で絶世の美女として描かれる女神ヘレネはやはり美しくいなければと思うけど、今はルッキズムと捉えられてしまう可能性もあるから、悩むことも……。

中西　もしかして演劇はやりづらくなっているんですか？

長塚　海外の演劇では今、人種や性別をどんどん超えています。明らかに両親がアジア系なのに、実子の役を金髪の白人が演じるとか。イギリスでは性別も混ざりはじめていますね。

中西　わぁ、面白いですね。

長塚　面白くもあり、そのことで表現しきれなくなる部分も出てくるかもしれません。これは僕らが高度な社会に適応するための序章かもしれない。でも、社会が一気に高度になるわけじゃないから、「何言ってんだよ。これはどう考えても男の役」という声も出てくるかもしれない。新しい表現をするのは覚悟が要ります。

中西　演劇ってシェイクスピアの時代からの積み重ねがあるからこそ、演者の性別や人種が変わることで、新しい世界が見えるのでは？

長塚　ある意味そのとおりで、演劇は新しいステージに踏み込もうとしています。

化粧の力、演劇の力を信じている。

――美しさの概念は時代によって変わるものですか？

中西　私、ちょうど昨日、弊社の広告やコーポレートメッセージなどで使われてきたコピーを見ていたんです。すると、過去は肌は明るい方がいい、目は大きい方がいいというように、見た目のことを表現するものが多くみられました。それが近年では「一瞬も　一生も　美しく」となり、昨年は「美しさとは、人のしあわせを願うこと。」。つまり美しさとは、人間がもつ、社会や良いことに対するプリミティブな方向へと変わり、幅が徐々に広がっているんです。

長塚　多様性ですね。

中西　はい。例えば、昔はシワやシミはない方がいいと、アンチエイジング一辺倒の考え方が世の中の主流でした。でも今は、30代から死ぬまでアンチエイジングと言われ続けても……と揺らいでいるところはあります。あるがままに年をとることもOKという考え方もあれば、予防してなるべくできないよう

にする、美容整形をして完璧に整える方法もある。バリエーションが増えているんです。

長塚　価値観は人それぞれですね。

中西　一方で、人は見た目を整えると気持ちが変わるのも事実です。例えば高齢者施設で入居者の方にメイクをすると、皆さんシャキッとされるんですよ。あと、朝のメイクが決まると、その日一日自信がもてるという話もあります。特に女性は毎日それに向き合っていて、その積み重ねが自己肯定感をつくったりもするんです。

長塚　わかります。この間、石川県珠洲市で地域の人たちとリーディング公演を行いました。限られた予算のなかで、絶対にヘアメイクは必要だからと手配して。そうしたら、皆さん「恥ずかしいわ」と言いながらも大喜び！　その3日間がより特別な日になったな、と。多分、次の日もちょっと意識したんじゃないかな。

中西　そう思います。よく化粧品は薬とは違い、なくても生きていけると言われます。だけど、人間の心に働きかけ、感情を変えうるもの。なぜこんなに心が躍るんだろう？　と、それは私も携わっていて面白いところなんです。化粧の力を信じているんですよ。

長塚　演劇も同じです。生きていくには必要ないものかもしれない。でも芸術ほど潤いのあるものはほかにはない。

中西　それは歴史が物語っていますよね。演劇も化粧も古代からあり、祭り事に深く関わってきた。どちらも人間の根源に刺さっているものという気がして。だからなくてはならないという説を、私はもっています。

長塚　同感です。

――自分の外見を整えることで、精神面まで変わるのは本当に不思議ですね。

中西　「あなたにとって美しさとは何ですか？」と世界で調査した事例があります。日本では、肌のきれいさを挙げる人、アメリカではメイクが自分の自信になり、社会で戦うための手段という話が多い。それがフランスをはじめとするヨーロッパになると、香りの話になるんです。確かにヨーロッパではフレグランスがとても売れていて、この人にはこの香りというくらい根付いています。美しさを視覚に頼り、全般的に捉えているのがアメリカで、ミクロで捉えているのがアジア。ヨーロッパでは見た目だけじゃない捉え方をしているという。

長塚　僕も「貌（かたち）」というタイトルを出した際、美しさって何だろう？　と考えました。直感で思い浮かんだのは、大人になりかけの10代の美しさ。もう自分には手の届かないものだけど、目を奪われる。あと僕は幼い頃から映画を多く見てきたことも影響しているのか、生き方のチョイスが美しさに直結していたりもします。中西さんにとって、美しさとは何ですか。

中西　私にとっての美しさは、後者に近いですね。その人の人生のあり方。また人の話を聞く時の態度や仕草、目の配り方などによって、この人は美しいと思ったりします。もちろん、見た目が感動的に美しい人もいるけれど、最終的にはきれいな心が大事。きっと、そういう人は表情がいいんでしょうね。

流行は、多様性とサステナブル。

――最近のメイクには何か特別な傾向がありますか。

中西　これも多様性に尽きます。昔は一見、メイクしていないようだけど肌がきれいに見えるものが求められていました。今はそういうものもあれば、韓国のはっきりしたメイク、チャイボーグと呼ばれる中国のメイク、欧米風の彫りがくっきりと出るメイクなど、バリエーションが豊富です。こんなに多いのは初めてかもしれません。男性向け、女性向けと決めつけない、中性的なたたずまいのプロダクトも多いです。

長塚　コスメやファッション業界は自ら流行をつくったりもしますが、今の流行は多様性？

中西　そう感じることが多いです。これもあり、あれもありという流行のつくり方ですね。大きなトレンドとしては、今なら自然環境に配慮した、サステナブルな商品でしょうか。

長塚　社会の流れそのものですね。演劇はつくっては壊すのが常で、これまではつくったセットも廃棄してきました。でも今はいかに環境を考えるかが問われていて、イギリスでは「シアター・グリーン・ブック」というガイドラインが出ています。

中西　まったく同じですね。

長塚　僕、多様性はいいことだと思うんです。人それぞれの美意識は多少歪んでいたとしても、全部認めればいい。同時に不安も覚えてしまう。すべてを認めると言いながら、緩やかな平均化が始まっているんじゃないかと。

中西　こんな表現をした方がいました。右手で手をつなぎながら左手で隣の人の首を絞めている、と。同調圧力というか、みんな幸せだよね！　と言いながら、平均値を下げているんじゃないかと懸念する方は多いです。

長塚　多様性と言いながら、枠からはみ出るものや過激なことは認められない。サステナブルじゃない、多様性をもっていないからと潰されていく。この表現ダメなの？　ということも今、確実に起き始めている気がして。それは誰かを侵害する可能性があるからだと思うけど、正直、難しさも感じています。

――中西さん、研究の成果によってできた商品を挙げていただけますか。

中西　最近だと、紫外線をカットするのと同時に、太陽の光を美容効果のある光に変換する技術が搭載されたデイセラムが印象的でした。

長塚　美容効果のある？

中西　はい。弊社研究所では、いかに日焼けを防ぐのかを徹底的に考え抜いて技術開発をしていました。日焼けが肌に影響を与えるということが一般的にも知れ渡ると、夏場は日傘をさして帽子にグローブと、徹底した日焼け対策をする人が増えてきて。でも、もしかしたら、太陽のもとで自由に動きたいという思いも抱えているかもしれない。それなら太陽の光を味方にできる商品ができたら太陽と共存しながらやりたいことを思う存分楽しめる。そんな発想から生まれた商品の一つが、弊社の代表的な日焼け止めブランドアネッサのUV美容乳液「デイセラム」です。

長塚　それは日焼けしないんですか？

中西　はい、紫外線を防ぎつつも、美肌にもなれるのです。このように、世のなかの捉え方によって、商品は着々と変わっています。

長塚　以前、舞台をつくっている時に、昭和の戦後間もない時代を表すために、俳優たちに日焼けしてほしかったんですが、メイクだと限界があり、僕を含め、みんなで外に出てたくさん歩いたんです。僕も普段は行かないのに、日に焼けろ！　と思いながら、浜辺に出たりして（笑）。

中西　塗ると皮膚がバカンスにいったみたいに小麦色になる、タンニングの商品もありますよ。ヨーロッパでは人気の商品です。

長塚　それを知っていたら（笑）。一度、舞台メイクを見ていただきたいですね。こうしてお話ししていると、技術的なことで進歩できることがたくさんありそうな気がします。また中西さんが一般社会での美の有り様を考えていらっしゃるなかで、演劇のヘアメイクがどう映るのか。異様に見えるのか、それともナチュラルに見えるのか、あるいはどういう側面で僕らがつくっている人物の造形が見えてくるのか。

中西　ぜひ。私も今日のお話から演劇に興味をもちました。過去からの歴史を受け継ぎながらも変容し、社会を映し出すのが演劇なんですね。

長塚　はい、社会を映し、照らし続けています。

中西　それが人間の根源的なものを表しているんだなと実感しました。美容と似ています。今度観劇に伺いますね。

長塚　はい、お待ちしています！

中西裕子　Yuko Nakanishi

名古屋大学大学院物質理学専攻（化学系）修士課程修了後、2004年資生堂に入社。スキンケア商品の処方開発研究、化粧品基剤の基礎研究、デザイン思考的アプローチを用いた研究テーマ設定を経て、現在は、資生堂のR&D戦略、新規研究の企画立案、資生堂R&Dオープンイノベーションプログラムfibonaのプロジェクトリーダーを務める。

資生堂 S/PARK

横浜・みなとみらいの「S/PARK（エスパーク）」は、資生堂の研究開発拠点でありながら、“美のひらめきと出会う場所”をコンセプトとしたさまざまな美のコンテンツが体験できる施設。上階には最先端の研究施設があり、生活者と研究員の交流の場としての役割も担う。

時代をつなぐ、“かたち”を残す。

写真家　浅田政志

9月3日（日）から始まる、「KAAT EXHIBITION 2023 浅田政志展 | YOKOHAMA PHOTOGRAPH ―わたし／わたしたちのいま―」。写真家の浅田政志さんは、明治時代の横浜写真をモチーフに、神奈川県在住の方々との共同作業によって、1枚の写真にその人の“いま”を表現しました。この展覧会を通して伝えたいこと、また、メインシーズンタイトルの「貌（かたち）」について、どう捉えているのか、お話を伺いました。

浅田政志　Masashi Asada

1979年、三重県生まれ。日本写真映像専門学校研究科を卒業後、スタジオアシスタントを経て独立。2009年、写真集『浅田家』（2008年赤々舎刊）で第34回木村伊兵衛写真賞を受賞。2020年には、著書の『浅田家』、および『アルバムのチカラ』（2015年赤々舎刊）を原案とした映画『浅田家！』が全国東宝系にて公開。2022年、最大規模の個展「だれかのベストアルバム」を水戸芸術館で開催。

1 今回のプロジェクトのテーマの一つ、明治期の横浜写真とはどんなものでしょうか。またそれをテーマに選んだ理由をお聞かせください。

写真は、1839年にフランスでダゲレオタイプ※が誕生し、ヨーロッパで技術が発展しました。日本に伝わったのは、江戸後期の頃。開港によって外国から写真の技術が入ってきて、日本の写真文化が始まりました。当時、写真の最重要拠点とされたのが、長崎と横浜です。長崎では坂本龍馬や幕末の志士を撮影した上野彦馬さん、横浜では下岡蓮杖（れんじょう）さんが活躍していました。馬車道に下岡蓮杖顕彰碑があるので、なかにはご存知の方もいるかもしれません。その頃の写真は、モノクロの写真のみで、その上に、日本画の絵師が彩色を施した写真がつくられました。それは「初期写真」と言われたり、後世の人々が「横浜写真」という通称で呼ぶこともあります。

今回、日本の写真のはじまりの地・横浜で展覧会をするにあたり、横浜写真をあらためて勉強しようと、横浜開港資料館を見学したり、美術館の学芸員や写真史に詳しい方などにお話を伺いました。当時の写真は、「湿板写真」というもので、磨いたガラスに薬剤を塗り、撮影後も暗室で薬剤を使い定着させるなど、専門的な知識と技術が必要でした。外国人の技術者もそう簡単には教えてくれないので、当時の日本人は苦労しながら技術を習得したそうです。あらためて横浜写真を眺めると、写真に対する情熱や、写真に残そうという強い意志を感じます。

※ダゲレオタイプ…ルイ・ジャック・マンデ・ダゲールにより発明され、1839年にフランス学士院で発表された世界初の実用的写真撮影法。銀メッキをした銅板などを感光材料として使うため、日本語では銀板写真とも呼ばれる。

日本の写真史のはじまり、「横浜写真」に捧げる展覧会。

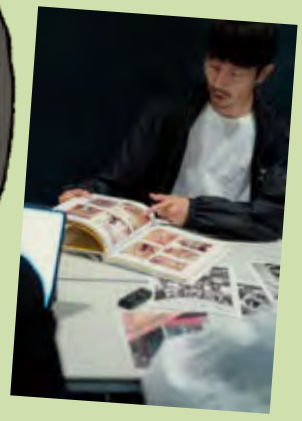
2 横浜写真には、ポートレートが多かったのでしょうか。

それもありましたが、外国の方が帰国する時の土産品として風光明媚な名所や観光地、着物姿の日本人の風習・生活・文化を伝えるものが主でした。アルバムも豪華で、とても高価なものだったそうです。生活の様子を撮影するには、野外にセットを組み自然光で撮影していました。構図がよく計算されているので、現代の映画を撮るような感覚に近いのかもしれません。露光時間も長いので、躍動的な一瞬を切り取るというよりは、演出が加えられた演劇的な“嘘っぽい”写真なんですが、僕の写真も演出の要素が強いため、共感する部分があります。徐々に湿板写真から乾板写真が主流になり、持ち運びも楽になったので、全国各地でロケをしていたようです。

今回の作品は、横浜写真の時代のように、KAAT内に簡易スタジオをつくって撮影したり、ロケで撮影したモノクロ写真にあとから彩色を加えました。当時と違うのは、デジタルカメラを使い、デジタルで彩色すること。横浜写真は、動きも少なく笑顔もありませんでしたが、今回はダイナミックな動きで表情も豊かです。横浜写真のテイストを踏襲しながら、今の技術で表現することで、写真上で過去と現在の対話ができたらと、かつて横浜の地で活躍した写真家たちに、捧げるような気持ちもあります。

3 今回の展覧会の被写体は神奈川在住の方を一般公募したそうですが、その理由は？

今回のプロジェクトは、神奈川県在住の人の「いま」も表現したいと思いました。今はスマホで簡単に写真を撮ることができますが、横浜写真の頃と同じくらいの熱量で臨んでくれる方と一緒に撮影したかったので、もし一生に1枚だけ写真を撮るとしたら、と問いかけました。チラシやインターネット、新聞などで告知したところ、小学生から99歳の方まで、たくさんの応募がありました。今回ご一緒できなかった方も、皆さんとても素敵なエピソードをお持ちの方ばかりで、本当は全員と撮影したかったくらいです。



4 これは神奈川県ならではだと感じた参加者は？

ホテルニューグランドの皆さんは、実際のマナー研修で、バナナをナイフとフォークで皮をむくことがあるそうで、それを開館当時から変わらない歴史のある部屋で再現してくれました。男子プロバスケットボールリーグBリーグの横浜エクセレンス、中華街で料理店を営む方とさまざまな方が参加してくれました。どの写真も、家族や仲間と一緒に撮影しても、カメラに目線を向けているのは一人だけです。その一人に事前にお話を伺い、その人が本当に残したい瞬間とは何か、どうやって撮影すればその人が表れるのかを、話しながら一緒に探っていくことから始めました。だから、言ってみれば、どの写真も神奈川県ならでは、その人だけの、その瞬間の写真になったと思います。

5 KAATの2023年度メインシーズンのタイトルは「貌（かたち）」です。浅田さんは、「かたち」というものをどう捉えていますか。

写真で「かたち」というと、ポーズ、配置の安定感、それに対して光がどう当たってるか、という見た目の要素も重要ですが、僕の作品の出発点は、被写体の人のなかにあるもの、その人じゃないと成立しない構図、その人だけの「かたち」です。今回の展示も、その人が残しておきたい思いを写真で表現しながら、同時に、日本の写真史ともつなげていこうと考えました。

写真の歴史は、今、大きな転換期を迎えています。デジタルカメラが主体になり、画像データを簡単にSNSにアップしたり、無限にコピーしたりすることもできます。しかし、その写真は、100年後も今と同じように見ることはできるのでしょうか。

東日本大震災で被災した岩手県で、津波によって流され、汚れた写真を洗浄して返却するボランティアに参加したのですが、震災の時にはデータは残らず、プリントアウトしたものだけが被災者の手元に戻ったということがありました。写真は残してこそ威力を発揮するものです。いつかの未来に過去の写真を見返した時に、言葉にできない感情が湧き上がったり、今だからわかることがあったりと、自分の人生をふりかえることができます。それが、写真の大きな役割の一つなのです。現代はスマホで気軽にいろいろな写真を撮り、皆さん撮る楽しさを磨いていますが、残すことにはあまり意識が向いてないのではないでしょうか。だから僕は今、写真家として「かたち」を残すことの大切さを伝えていきたいと思っています。

写真の役割は、「かたち」を残すこと。

かたちの輪郭、美しさへの犠牲と献身

演劇の舞台にはさまざまな「かたち」をまとった人物が登場します。若く瑞々しい人、命が果てる間際の老人、無邪気な子ども、戦いに敗れた武士、未来を生きる人、この世ならざる妖怪など、衣裳やヘアメイク、小道具を加えた扮装全体のデザインを手がける人物デザイナーの柘植伊佐夫さんは、どのように人物の「かたち」をつくり上げるのでしょうか。また、観客の誰もが納得する「美しさ」の秘密とは？

「かたち」とは、「波」である

――柘植さんは、NHK大河ドラマ『どうする家康』や、KAATでも『蜘蛛巣城』など数多くの作品で人物デザインをされていますが、どのようなプロセスで人物の「かたち」をつくっていくのでしょうか。

「人物デザイン」は、演劇や映像などの人物像を視覚的に形づくる仕事です。ご依頼をいただく段階では脚本が完成していないことも多く、演出家や脚本家の頭のなかに、アイディアがぼんやりと雲のように浮かんでいる状態から、一緒につくり上げていく場合も多くあります。最初に考えるのは、雰囲気、あるいは色や質感などの抽象的なものです。そこに技法、時間、アイディアを投入して、雲のようなものが徐々に固く物質化していく、といったイメージでしょうか。

「かたち」とは何かを考える時、必ず輪郭を伴います。アイディアが雲の状態の段階では輪郭はぼんやりとしていますが、それが徐々にはっきりと明確になって人物の「かたち」になります。輪郭は、「境界線」「境界面」と言い換えることもできるかもしれませんが、その内側と外側が均衡を保っている状態です。ですから「かたち」をつくるには、輪郭の内側を考えるのと同時に、外側の環境も考慮しなくてはなりません。18世紀のフランスが舞台の演劇なら、ロココ様式の柄の入った壁紙に柄もののカーテン、デコラティブな椅子が置かれ、人物も華やかな柄の入ったドレスを纏(まと)います。舞台上のすべてのものが柄と色に覆われますが、そのわずかな違いによって、人物とそれ以外に対比が生まれ、ぼんやりとした輪郭が生じます。

私には、「輪郭」は一本の線ではなく波のようなものではないかという思いがあります。レオナルド・ダ・ヴィンチの絵画は、スフマート※という技法を用い、色彩のレイヤーによって輪郭を成立させましたが、レイヤーの幅が狭く集中すると波は線に近くなり力強い輪郭が現れ、広がれば緩やかな波に変わり穏やかで曖昧な輪郭になります。そのような捉え方で、「輪郭」になる波の強さを人物像に合わせ、「かたち」の放つ印象や心象を差配するのも私の役割です。

輪郭を波と捉える考え方は、舞台上に精霊が登場する時に役立ちました。KAATで上演した『蜘蛛巣城』(2023年上演)では鷲津武時(早乙女太一)と、物の怪の老婆(銀粉蝶)が登場します。実際に舞台に立つ役者は同じ"人間"ですが、輪郭の捉えを変えることで、人間と妖怪の対比が生まれます。武時よりも老婆は曖昧な輪郭にして波の広がりを意識しました。

さらに、『蜘蛛巣城』『常陸坊海尊』(2019年上演)など時代設定のあるものは、時代考証を行います。作品によって史実を踏襲する場合とアレンジする場合があります。芸術にとって史実の再現率は道具の一つとなります。『蜘蛛巣城』では、現代的なプリーツの生地と和装の複合を試みました。どこを守りどの部分を突き抜けるのか、そこは「守破離」です。

「美しさ」の根幹にあるのは、「犠牲」と「献身」

――衣裳の着心地や動きやすさも、人物デザインにおいて重要な要素でしょうか。

身体の「自由」「不自由」は、「かたち」を考えるうえで大切な要素です。僕がデザインする衣裳は着心地がよいものばかりではありません。造形の必要から身体的な拘束がある場合、演者はそれを乗り越える努力を強いられて新しい表現が生まれたり、次のステージに飛翔する場合があります。先日、能装束で撮影を行ったのですが、重さのある能装束では、躍動感のある動きは不可能です。しかし重さと動きの拘束があるからこそ、極限にまで研ぎ澄まされて静謐な表現に昇華した歴史を感じます。私の衣裳に、演者から「動きづらい」などの苦情が上がることも時折あるのですが(笑)、長丁場の公演においてはどういった衣裳が適切なのか、その衣裳によってどれくらいの表現ができるのかは重要な条件です。ただし自由と不自由の攻めぎ合いによって、作品にふさわしい衣裳の輪郭が生まれる部分も無視できないと見据えています。

――人物デザインするうえで「美」「醜」のどちらも手がけることがあると思いますが、柘植さんにとって「美しい」とはどんなことですか。

「美しさ」の根幹にあるのは、「犠牲」と「献身」だと思います。同じものを見ても百人百様の受け取り方がありますから、「美しさ」の嗜好は人それぞれですね。一見して美しいと感じたけれどじつは醜いものだったということもありますし、「様式・主義・流派」によっても「美しさ」のあり方は異なります。そのように「美しさの条件の揺らぎ」があるなかで、私の仕事は、観客の皆さんにある程度同じ対象やタイミングに対して美しい、醜いと感じていただく必要もあります。そこで、「美しさ」を生み出すには「練度」が不可欠なのだろうと思います。

時間や労力を惜しみなく捧げた作品は、美しさの域に到達する確率が上がります。役者が作品のために、例えば重い衣裳を着て、制限された動きのなかで表現を研ぎ澄ませることで到達する地点もあります。人間関係で考えるなら、家族や恋人に対して、あるいは他人に対しても、犠牲を厭わず献身的に尽くす姿。自立した人間が他者に対して献身できるのか。その関係性に「美しさ」が宿り、また、その精神が「かたち」として表出するのではないかと考えています。私の経験則では、一つの作品に対して、どれだけ自分自身を捧げたのか。その強度が高いほど作品愛も高まり、良い作品へ深まり、評価につながることが多いように感じます。もし、評価されなかったとしても、それらは自分にとって価値ある作品です。「美しさ」とは、「自分が犠牲と献身を払い、他者がそれを感じる関係に宿る」のではないかと思います。

※スフマート…輪郭線を描かず、油絵の具を薄く何層にも重ねることでグラデーションが生まれ、深みや立体感、形状を表現する技法のこと。有名な作品はレオナルド・ダ・ヴィンチの『モナ・リザ』

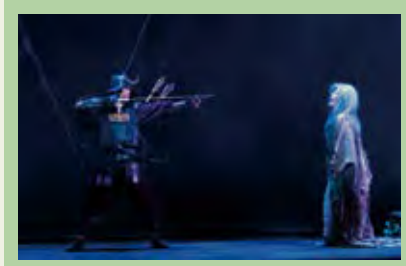
柘植伊佐夫　Isao Tsuge

人物デザイナー、衣裳デザイナー、ビューティーディレクター。1960年、長野県生まれ。1980年代よりヘアメイクアーティストとして国内外で活躍後、映画や舞台のビューティーディレクションを担当。2008年以降、作品中のキャラクターコンセプト、衣裳、ヘアメイク、小道具を総合的に生み出す「人物デザイン」というジャンルを開拓し活動している。主な作品に、NHK大河ドラマ『龍馬伝』『平清盛』『どうする家康』、NHKドラマ『岸辺露伴は動かない』全期と映画『岸辺露伴 ルーヴルへ行く』など。「人物デザインの開拓」により第30回毎日ファッション大賞／鎌岡阿美子賞を受賞。舞台は長塚圭史演出『あかいくらやみ～天狗党幻譚～』『常陸坊海尊』、赤堀雅秋演出『蜘蛛巣城』、シディ・ラルビ・シェルカウイ演出『プルートゥ PLUTO』『舞台・エヴァンゲリオン ビヨンド』など。

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

『蜘蛛巣城』

2023年2月25日(土)－3月12日(日)
上演台本：齋藤雅文、赤堀雅秋｜演出：赤堀雅秋
舞台写真撮影＝引地信彦



⬆鷲津武時(早乙女太一)が、物の怪の老婆(銀粉蝶)に対峙するシーンでは、この世ならざる存在と、武士の対比を衣裳で表現。

⬇鷲津武時の軍装と、老婆のデザイン画。武時の若々しさ、物の怪の老婆の不穏な雰囲気は衣裳の色使いからも窺える。

⬇都築国春(久保酎吉)と小田倉則保(長塚圭史)のデザイン画。人物像を色彩や全体の雰囲気で表現。伝統的な和装を踏襲しながら、動きやすいプリーツで仕立てられている。

⬆舞台上では、一見すると伝統的な和装だが、生地の質感や、プリーツによる布の動き方に、人物の内面が浮かび上がるようだ。

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

『常陸坊海尊』

2019年12月7日(土)－12月22日(日)
作：秋元松代｜演出：長塚圭史
舞台写真撮影＝岡千里

⬆海尊の妻と称する巫女のおばば(白石加代子)と山伏・登仙坊玄卓(大石継太)。衣裳が二人の対比を表している。

⬇おばばと山伏のデザイン画。人物像を反映したデザイン画のニュアンスが実際の衣裳に反映されている。

⬇劇中では、伝説の人物・海尊は、3人の異なる海尊として登場する。左は現代的なスーツ姿の第三の海尊、右は第一の海尊。

⬆おばばの孫娘・雪乃(中村ゆり)に翻弄される啓太(平埜生成)。

REVIEW

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース
『蜘蛛巣城』

2023年2月25日（土）— 3月12日（日）
KAAT神奈川芸術劇場〈ホール〉

原脚本：黒澤明、小國英雄、橋本忍、菊島隆三
脚本：齋藤雅文
上演台本：齋藤雅文、赤堀雅秋
演出：赤堀雅秋
出演：早乙女太一、倉科カナ
長塚圭史、中島歩、佐藤直子、
山本浩司、水澤紳吾、
西本竜樹、永岡佑、新名基浩、清水優、
川畑和雄、新井郁、井上向日葵、小林諒音、
相田真滉、松川大祐、村中龍人、
荒井天吾・田中誠人（Wキャスト）、
久保酎吉、赤堀雅秋、銀粉蝶

これは、乱世を生きる我々の物語

文＝轟夕起夫（映画評論家）

15年ほど前に、ある雑誌の特集で早乙女太一さんの密着取材をしたことがあります。当時彼は16歳にして大衆演劇界のカリスマ。「100年に一人の天才女形」と呼ばれ、どんどん活躍の場を広げている頃で、しかも古巣「劇団朱雀」の一員として全国津々浦々を回ってもいました。取材で同行したのは静岡県浜松市、24時間営業の健康センターでして、食堂のホールにて芝居と舞踊ショーを披露する早乙女さんを、熱烈なファンの方々とともに至近距離で目撃しました。

撮影＝引地信彦

と、そんな個人的記憶を携えて劇場に赴き、早乙女さんが主演を務めた『蜘蛛巣城』を観劇したわけです。人間の業（カルマ）を集め、煮詰めたようなシェイクスピアの『マクベス』をそのタイトルで映画化した際、監督黒澤明が三船敏郎のために生み出した戦国武将・鷲津武時が今回の役。先行してずらりとビッグネームが並んでいますが、台本の改変と演出を手がけた赤堀雅秋さんならではの『蜘蛛巣城』に仕上がっていました（作家性が浮き彫りになるのは当然のようでいて、これが実に難しい！）。

物の怪の老婆の予言通りに、そして、倉科カナさん扮する妻の浅茅の働きかけもあって鷲津は出世を果たしていくのだけれども、悪行には報いが待っており、疑心暗鬼に押しつぶされ、自滅してゆく「若き夫婦の迷走と転落」が赤堀版の肝で、装いは時代劇でも目の前の“時代の空気”を呼吸している現代劇の肌ざわりがありました。つまり、欲望の矛先がどこか、「勝ちたい」よりも「ふるい落とされたくない」というネガティブ心理に支配されている。また、赤堀版オリジナルの鷲津の出自、足軽や農民の描き方には今の世界情勢がオーバーラップし、否応なく、乱世を生きる我々の物語に感じられます。

それを（倉科カナさんやキャスト陣と）体現した早乙女さんの所作、殺陣の素晴らしさは言わずもがな。本当にいい役者になりました。あの浜松市の健康センターは残念ながらすでになくなってしまいましたが、早乙女さんは変わらずチューンアップし続けているのが（乱世のなかの一つの）希望です。

轟夕起夫（とどろき・ゆきお）
1963年東京都生まれ。単著『映画監督になる15の方法』（洋泉社）、『轟夕起夫の映画あばれ火祭り』（河出書房新社）、共著・編著は『清/順/映/画』（ワイズ出版）、『好き勝手 夏木陽介：スタアの時代』（講談社）、『伝説の映画美術監督たち×種田陽平』（スペースシャワーネットワーク）など。

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース
『掃除機』

2023年3月4日（土）— 3月22日（水）
KAAT神奈川芸術劇場〈中スタジオ〉

作：岡田利規
演出：本谷有希子
音楽：環ROY
出演：家納ジュンコ、栗原類、
山中崇、環ROY、倭木藤太、
猪股俊明、モロ師岡

みかんの皮と卵の殻

文＝しりあがり寿（漫画家）

撮影＝加藤甫

本谷有希子さんのお芝居はちょっと久しぶりで、しかもなんとチェルフィッチュの岡田利規さんの脚本ということで楽しみだった！

幕があく。ヘンテコな舞台だ。掃除機が舞台の上を歩き回りながら家族一人ひとりの話を聞いている。掃除機だけに本音を吸い出しているのか？ 舞台はまるで剥いた後のみかんの皮を広げたみたいにグニャッと広がっている。なんだかグターッて感じ。もうなんか諦めた感じ。孤立しているそれぞれの部屋を俯瞰できるし関係の歪みも感じちゃったりする。

みかんの皮といえば家族って卵みたいだな。ズラッと並んで皆同じように見えるけどそれぞれの家族の中身は違ってたいていドロドロしている。なかには腐っているのもあるかもしれない。そう、ヒナが卵の殻を割って外に出て家は一つの役割を果たすのかもしれないけどこのお芝居ではヒナは卵の殻を破らない。殻のなかで長い長い不快な時を過ごしている。不快じゃないのか？ 案外居心地いいのか？

娘さん、あんたはどうしてここにいるんだい？ どうして出ていかないんだい？
おお！ 情けない父親が出てきた！ なあオヤジさん、あんたは子どもたちに何をしたんだい？ 何もしなさすぎたのかい？ あんたの愛情が卵の殻を厚くしたのかい？ あんたの臆病さが子どもに感染したのかい？ 比較的まともそうな弟よ、君はこの家をどうやって継ぐのだろうか？ 本音を聞かしてくれ……いつの間にか自分が掃除機になっている。現実に社会に出てゆく姉と弟の父親である自分としては掃除機になって聞き出したいことがあふれてきた……。

本谷さんのお芝居はやっぱり凄かった。いつだってそうだ。薄くユーモアで包んでいるけど容赦ない。ヒトゴトだと思って笑ってるうちに笑われているのは自分だと気づく。それは「切られた人、気づいてないよね」的な鮮やかさだ。
そして相変わらず切られたことに気づいてない自分は
「オレのとこはもう少しマシだよね」とぬるい感想を抱いて帰るのだった。

しりあがり寿（しりあがり・ことぶき）
多摩美術大学を経てビール会社勤務の傍ら、1985年『エレキな春』で漫画家としてデビュー。独立後は、幻想的あるいは文学的な作品など次々に発表、漫画家として独自な活動を続ける一方、近年ではエッセイ、映像、ゲーム、アートなど多方面に創作の幅を広げている。2014年、紫綬褒章受章。

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース
『虹む街の果て』

2023年5月13日（土）— 5月21日（日）
KAAT神奈川芸術劇場〈中スタジオ〉

作・演出：タニノクロウ
出演：渡辺庸介（パーカッショニスト）、
赤星満、
神奈川県民を中心とした街の人たち
アウラ・イデタ、阿字一郎、
アリソン・オパオン、小澤りか、
川口麻美、木村志穂、児安俊重、
ジョセフィン森、ソウラブ・シング、
ビルラ・スニル、ファティマ悠、
ポポ・ジャンゴ、馬双喜

虹む街の果て、あるいは笑顔の虹む街

文＝萩原健（明治大学国際日本学部教授）

閉業の近いコインランドリーで交流する、出自のさまざまな人々を豊かに描いた『虹む街』から2年。色とりどりだった精巧な街の装置は一変して、全部がくすんだ緑色。苔むすほど長い時間が経ったらしい。

今回も各国にルーツを持つ人々が出演し、前作の出演者も数人。横一列になった彼らの紹介から始まり、稽古がそれぞれの笑顔に救われたと伝えられる。全員が緑色のツナギを着て配置につくと、ランドリーで緑色のストッキングが洗濯完了。ロボットの頭をしたメンバーがこれを干したり畳んだり。

撮影＝田中亜紀

前作でインド料理店だった場所の調理器具がパーカッション楽器にされて愉快な音を出し、中華料理店だった場所からは植物の鉢が「餃子」として取り出される。上方には靴を釣る男性。モノを持つことが幸せとは限らない、というメッセージのあと、マドンナの『マテリアル・ガール』が歌われる。下手の部屋がディスコになって皆が入る一方、中央で、靴を釣っていた男性がカラフルなレオタードで踊る。上手からは電話ボックスが入場、中の男性がストッキング賛歌を歌う。終盤は全員が緑色のストッキングを履き、すっかり昆虫のよう。結びには再び出演者紹介。稽古でそれぞれの笑顔に救われたと繰り返される。

人の世が去り、「虹む街の果て」に緑色の虫たちが暮らす光景だろうか？ だが「果て」だとしても、悲壮感は皆無だ。命の数々が、コロナ禍のなかでの“寡黙劇”だった前作とは対照的に、大いに歌い踊る。生を寿（ことほ）ぐ彼らの笑顔に救われる。思えば、多くの市民がこの装置の塗装に参加し、観客は上演の前後、装置を間近で見学できた。たくさんの命の笑顔が虹む、朗らかな街に迎えられる幸福な80分だった。

萩原健（はぎわら・けん）
明治大学国際日本学部教授。主な研究分野は、20世紀以降のパフォーミング・アーツ、その歴史と異文化間交流（主に日本とドイツ）。著書に『演出家ピスカートアの仕事 ドキュメンタリー演劇の源流』（森話社）など。

長塚圭史の思いつき

これからの新しいKAATを探るなら、そのヒントは長塚芸術監督の頭のなかにあるはず。そこで、今号制作の過程でつかんだ手応えや新しい発見について聞いてみました。

2023年度のメインシーズンのタイトル「貌（かたち）」を巡る今回の号はいかがでしたか。実はこのタイトル、自分でもとても気に入っているんです。「かたち」は芸術と切り離せないものです。舞台芸術は人間の内面を表現しようと試みますが、舞台の上には「かたち」「外見」となって現れます。「ルッキズム」という言葉があるように、容貌には好みや偏見が生じることがあります。我々が「かたち」に魅了されたり忌み嫌ったりすることの正体とは何でしょうか。劇場は思考を深める場所です。簡単に語ることが難しい「かたち」について、このメインシーズンを通して一緒に考えてみましょう。

※ 一部コンテンツはインスタグラムや劇場ホームページ（https://www.kaat.jp）でも展開しております。ご意見・ご感想をぜひX（旧ツイッター）・インスタグラムに「#kaatpaper」をつけて投稿してください。

〈第7回〉

神奈川へ、会いに

〈協同組合伊勢佐木町商店街まちづくり委員会〉

長塚芸術監督が、今、気になっている街の人にふらっと会いに出かけます。今回はJR関内駅から伸びるイセザキ・モールを中心に、伊勢佐木町1・2丁目地区、3～7丁目地区の活性化を担う、〈協同組合伊勢佐木町商店街まちづくり委員会〉の理事長・牛山裕子さん、副委員長・川井善和さんを訪ねました。

長塚　今日はここまで歩いて伺ったのですが、この街はとても面白いですね。きれいな街並みですが、古本屋や喫茶店もしっかり残っています。シネマ・ジャック＆ベティや横浜シネマリンなどのミニシアターも伊勢佐木町ですよね。

牛山　古くからあるお店は減少していますが、比較的残っている方かもしれません。開港からの歴史を考えると、関内が外国人居留地であるのに対して、吉田橋からこちらは“関外”、港で働く労働者たちの街でした。また当時、生糸の輸出が盛んで、生糸を山梨や長野から横浜の港へ運んでいました。その輸送に携わる人たちの宿泊所が立ち並び、横浜で働いたり嫁いできた人たちのための娯楽として、相撲などの興行や芝居小屋も増えました。その流れで、明治30年頃から、伊勢佐木町は映画館の街になったんです。

長塚　やはりここは、横浜の文化の発展に大きな役割を果たした街だったんですね。

牛山　食もそうです。横浜発祥の牛鍋の店も、多い時は伊勢佐木町から曙町にかけて28軒ほど軒を並べていました。かつて上大岡にシルクの捺染工場があり、休日には女工さんたちがここで芝居や買い物を楽しむので、甘味処も多かったそうです。現在でも、洋菓子の「浜志まん」は地元の人でにぎわっていますが、レトロな喫茶店は外国の方にも人気です。

写真＝石渡朋

伊勢佐木町商店街にて。左から、〈協同組合伊勢佐木町商店街まちづくり委員会〉副委員長・川井さん、理事長・牛山さん、長塚芸術監督

長塚　このあたりは、タイ料理や韓国料理、中国料理のお店もたくさんありますね。

牛山　海外の方は、特にリーマンショック以降、一気に増えました。近くの市立横浜吉田中学校には、現在、40ヶ国以上の子どもたちが通っています。マレーシアやインドネシア、ベトナムの方も多く、私もいつもAI通訳機を持ち歩いているんですよ。

長塚　進んでるなあ！　国際色豊かでもお互い尊重し合って暮らしているんですね。

牛山　歴史的にも他所から移り住む人が多い地域でしたから、それが普通のことなんです。とはいえ、今後は外国の方も一緒に、どのようにまちづくりをするかが課題の一つです。

長塚　多種多様な文化が織りなす街だから、ある種の迫力と魅力を感じます。

川井　イセザキ・モールは、有隣堂などがある1・2丁目あたりと、地元の人が行き交う3～7丁目ではだいぶ雰囲気も変わります。1丁目にはかつてゆずやN.U.などのミュージシャンが路上で演奏していた場所もあり、1丁目の「CROSS STREET（クロスストリート）」には青江三奈さんの『伊勢佐木町ブルース』の歌碑があります。9月にはお三の宮日枝神社の例大祭でイセザキ・モールにもお神輿が来たり、いろんな楽しみ方ができるんです。私たちの裏テーマは「もっと奥までいらっしゃい」。今の私たちの課題は、この街の魅力をきちんと情報発信していくこと。そのあたりが足りないなと感じているところです。

長塚　それは我々KAATの課題の一つでもあります。伊勢佐木町はお芝居や映画など文化的な歴史もあり、今ではさまざまな人たちが暮らすとても魅力的な街です。KAATから歩いても遠くありません。ぜひ今後一緒に街を盛り上げていきましょう。

芸術監督・長塚圭史、次回作に向けて　ただいま、KAAT準備中

県内各所、調査中！

2024年2月から3月にかけて上演予定の、KAATカナガワ・ツアー・プロジェクト第二弾『箱根山の美女と野獣』『三浦半島の人魚姫』。21年度から隔年で実施する本プロジェクトは、神奈川県を舞台にした新作を長塚芸術監督が書き下ろし、KAATのみならず県内各地を巡演します。第二弾は、二本立て上演。本プロジェクトでは、毎回、県内のさまざまな場所を訪れ、構想を練る長塚芸術監督。今回は、そのリサーチ中の様子をお届けします。

まず、『三浦半島の人魚姫』の調査のため、三浦半島を早朝から駆け巡る長塚芸術監督とKAAT制作スタッフ一行。「人魚が現れそうな海辺」を求めて、無人島・猿島へ渡り、半島の海辺、観音崎、浦賀エリアなど、各所を訪れました。作品の題材になりそうなスポットのリサーチはもちろん、その土地に眠る歴史や、民話、寺社仏閣にも注目しながら、作品のイメージを膨らませ、隈なく半島を巡りました。

いよいよリサーチも大詰め。「この辺りに人魚が出そうな海はありますか？」と偶然見つけたパン屋のオーナーに尋ねた長塚芸術監督……。果たして、人魚の現れる海辺は見つかったのでしょうか？ そして、もう1作品、箱根山のリサーチも鋭意進行中です！

『箱根山の美女と野獣』は軽やかにジェンダーを超えたロマンチックコメディ、『三浦半島の人魚姫』は現代の共働き夫婦に起きる思いがけないファンタジー、という二本立てのKAATカナガワ・ツアー・プロジェクト第二弾、ぜひお楽しみに！

箱根登山鉄道と

猿島の砲台跡にて

KAATな人の行きつけ

《第6回》

LIVING CRAFT BEER BAR

KAATの周辺は、食事や買い物、観光スポットが豊富な魅力的なエリア。
そこで出演者やアーティスト、スタッフが足しげく通う、
この街の“行きつけ”をご紹介します。

写真＝石渡朋

テイスティングセット（130ml×3）　1,500円（税込）
スペアリブのクラフトビール煮込み　1,650円（税込）

KAATの裏通り（海岸教会通り）に面した「LIVING CRAFT BEER BAR」。19年前、KAATがまだ建設中だった頃に、店主の荒井淳さんは、ここにベルギービールを扱うカフェをオープンしました。その後、国内クラフトビール市場の成長を受けて、2015年に国産のクラフトビールを中心とするビアバーとしてリニューアルしました。現在は、北海道から沖縄までの30ほどの醸造所から、その季節に美味しいビールが12タップほど、ビンも数銘柄取り揃えています。ビールの銘柄は常時入れ替わるので、いつも新しいビールに出合えます。まずは味の好みを伝えて、テイスティングセットで自分好みのビールを探してみましょう。23時まで営業しているので、夜公演のあとでも、観劇の余韻に浸りながらビールと食事を楽しむことができます。

LIVING CRAFT BEER BAR
（リヴィング クラフト ビア バー）
〒231-0023
神奈川県横浜市中区山下町24-7 シティコート山下公園 1F
☎045-662-3938
営業時間：月～金 16:00 ～ 23:00、土・祝 15:00 ～ 23:00
日曜定休

主催公演

≪メインシーズン「貌」プログラム≫

KAAT EXHIBITION 2023

浅田政志展
YOKOHAMA PHOTOGRAPH
ーわたし/わたしたちのいまー

9月3日(日)ー10月1日(日) 中スタジオ・アトリウム

作家:浅田政志

二宮和也主演、映画『浅田家!』のモデルになった写真家・浅田政志。新作撮り下ろしによる初の劇場での個展

写真発祥の地で、過去から現在へと時代を超えて、神奈川に暮らす人々の「貌」を写し出す。

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

『アメリカの時計』

9月15日(金)ー10月1日(日) 大スタジオ

作:アーサー・ミラー　演出:長塚圭史　翻訳:髙田曜子
出演:矢崎広、シルビア・グラブ、中村まこと
　　天宮良、大谷亮介 ほか
チケット発売中

2023年度メインシーズン「貌」開幕を飾る演劇作品

アメリカの劇作家 アーサー・ミラーが描く、20世紀初頭、大恐慌によって未曽有の混乱に落ちたアメリカと、ある家族の年代記。人間の本質と社会のシステムに迫る。

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

『SHELL』

11月11日(土)ー26日(日) ホール

作:倉持裕
演出:杉原邦生　音楽:原口沙輔
出演:石井杏奈、秋田汐梨
　　岡田義徳 ほか
9/9(土)一般発売

倉持裕×杉原邦生、注目の初タッグで送る青春ファンタジー!

年齢も性別も違ういくつもの人生を、いくつもの顔をもって同時に生きる特異な人々が登場する摩訶不思議な世界を描く。

KAAT×東京デスロック×第12言語演劇スタジオ

『外地の三人姉妹』

11月29日(水)ー12月10日(日) 大スタジオ

翻案・脚本:ソン・ギウン　演出:多田淳之介　翻訳:石川樹里
出演:伊東沙保、李そじん、亀島一徳、原田つむぎ、アン・タジョン、
　　夏目慎也、佐藤誓、大竹直、田中佑弥、波佐谷聡、松﨑義邦、
　　イ・ソンウォン、佐山和泉、鄭亜美
9/30(土)一般発売　9/27(水)KAme先行

日韓の歴史を見つめる話題作。待望の再演!

チェーホフの三大戯曲に数えられ人気の高い『三人姉妹』を翻案。1930年代日本統治下の朝鮮北部を舞台に、時代に翻弄される人々を日韓俳優陣の競演で描く。

KAAT神奈川芸術劇場プロデュース

『ジャズ大名』

12月9日(土)ー24日(日) ホール

原作:筒井康隆<「エロチック街道」(新潮文庫)所収>
上演台本:福原充則　山西竜矢
演出:福原充則　音楽:関島岳郎　振付:北尾亘
出演:千葉雄大、藤井隆
　　大鶴佐助、山根和馬、富田望生、大堀こういち ほか
10/7(土)一般発売　9/16(土)KAme先行

巨匠・筒井康隆の傑作小説を、演出家・福原充則が舞台化

江戸末期、アメリカから漂着した黒人奴隷と出会った音楽好きの藩主が彼らの奏でる音楽の虜となり、城中でジャム・セッションを繰り広げる奇想天外なコメディ。

横浜国際舞台芸術ミーティング 2023(YPAM2023)

12月1日(金)ー17日(日) 大スタジオほか

〈チケット取り扱い・お問い合わせ〉
チケットかながわ　0570-015-415(10:00 ～ 18:00)

提携公演

11月 黒田育世再演譚vol.3『YSee』

メインシーズン「貌」シーズンチケット

メインシーズンの複数演目のチケットをセットでご購入いただける、KAATオリジナルグッズ付きシーズンチケットを発売! さらに! シーズンチケット<前期><後期>両方ご購入いただいた方を2024年度ラインアップ発表会にご招待します。(2024年2月実施予定。応募者多数の場合抽選)　詳細はこちら

前期
〈対象作品〉
『アメリカの時計』(9/15-10/1)
『SHELL』(11/11-11/26)
『ジャズ大名』(12/9-12/24)
チケット料金:(一般/S席のみ、全席指定・税込) 20,700円
チケット発売中

後期
〈対象作品〉
『外地の三人姉妹』(11/29-12/10)
KAATカナガワ・ツアー・プロジェクト第二弾(2024年2/3-2/12)
『スプーンフェイス・スタインバーグ』(2024年2/16-3/3)
9月23日(土・祝)発売

KAAT 公演スケジュール 2023 AUTUMN-WINTER

	9月2日(土) 第2回 FIDA GOLD CUP	ホール
貌	9月3日(日)ー10月1日(日) KAAT EXHIBITION 2023 浅田政志展 | YOKOHAMA PHOTOGRAPH ーわたし/わたしたちのいまー	中スタジオ・アトリウム
	9月9日(土)ー9月10日(日) 内村文化祭'23 初心	ホール
	9月15日(金)ー9月18日(月・祝) TOSHIKI KADOMATSU presents MILAD 2『THE DANCE OF LIFE ～ Final Chapter ～』	ホール
貌	9月15日(金)ー10月1日(日) KAAT神奈川芸術劇場プロデュース『アメリカの時計』	大スタジオ
	9月22日(金)ー9月24日(日) 『ブラッククローバー the Stage』	ホール
	9月27日(水)ー9月28日(木) 全国公立文化施設協会　劇場・音楽堂等職員　舞台技術研修会	ホール
	10月8日(日)ー10月11日(水) ライブ・スペクタル『NARUTO-ナルト-』～忍の生きる道～	ホール
	10月8日(日) JDSF ブレイキン　関東甲信越ブロック選手権	大スタジオ
	10月15日(日)ー10月22日(日) 本格ミステリー歌劇『46番目の密室』	ホール
	11月9日(木)ー11月12日(日) 黒田育世 再演譚vol.3『YSee』	大スタジオ
貌	11月11日(土)ー11月26日(日) KAAT神奈川芸術劇場プロデュース『SHELL』	ホール
	11月17日(金)ー11月19日(日) 劇団そとばこまち45周年記念 第125回公演『贋作写楽』	大スタジオ
貌	11月29日(水)ー12月10日(日) KAAT×東京デスロック×第12言語演劇スタジオ『外地の三人姉妹』	大スタジオ
貌	12月1日(金)ー12月17日(日) 横浜国際舞台芸術ミーティング 2023(YPAM2023)	大スタジオほか
貌	12月9日(土)ー12月24日(日) KAAT神奈川芸術劇場プロデュース『ジャズ大名』	ホール
	毎月開催 (各月の日程は決定次第発表します) KAATフレンドシッププログラム「みんなのKAAT バックステージツアー」	ホール

※情報は8月29日現在のものです。変更となる場合がございます。予めご了承ください。詳細は、各公演のウェブサイトをご確認ください。

表紙写真について

今号の表紙写真は、「KAAT EXHIBITION 2023 浅田政志展」の展示作品から。写真に寄せられた、横浜中華街の鳳林さんのエピソードを紹介します。

父親が、中華街の店を居抜きで手に入れ開店した時、一緒にやろうと思い脱サラ。他店で前菜の修行をしたあと、父の店に入りいろいろな料理を覚えた。厨房も好きだけど、フロアーでお客さんと話すのも大好きで調理の手が空くとすぐに客席へ。そんなお調子者の僕の監視役は妻! しっかりものの奥さんがいないとこの店はもちません。これからも夫婦で頑張って、お客さんが喜んでくれる料理をつくり、笑顔でのサービスをしていきます。

中国料理 鳳林
紅林 清勇・紅林 藍華

KAAT 神奈川芸術劇場

〒231-0023 神奈川県横浜市中区山下町281
TEL.045-633-6500(代表) FAX.045-681-1691
https://www.kaat.jp

- みなとみらい線:渋谷駅から東横線直通で35分!横浜駅から6分!日本大通り駅から徒歩5分。元町・中華街駅から徒歩8分。
- JR根岸線:関内駅または石川町駅から徒歩14分。
- 市営地下鉄:関内駅から徒歩14分。
- 市営バス:芸術劇場・NHK前すぐ。
  横浜駅前東口バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約25分)
  桜木町駅前バスターミナル 2番のりば乗車(所要時間約10分)
  ※上記のりばから発車するバスはすべて「芸術劇場・NHK前」を通ります。ただし、148系統急行線を除く。
- 神奈川芸術劇場有料駐車場(65台)もご利用ください。

指定管理者:(公財)神奈川芸術文化財団

KAAT PAPER 読者アンケート

今後の誌面づくりに活かすため、皆さまのご意見・ご感想をぜひお寄せください。アンケートにご回答いただいた方のなかから抽選で、1組2名様にKAAT神奈川芸術劇場プロデュース『SHELL』(作:倉持裕、演出:杉原邦生/ご招待日:2023年11月16日(木)19:00開演の回)のチケットをプレゼントいたします。

※チケットプレゼント応募期限:2023年10月20日(金) ※厳選なる抽選のうえ、当選者の発表はメールでのご連絡をもって代えさせていただきます。

季刊誌 神奈川芸術劇場 KAAT PAPER 秋号(年3回発行) 2023年8月29日発行 発行=KAAT神奈川芸術劇場 編集=伊藤総研株式会社、松田美保 編集協力=株式会社ボイズ クリエイティブディレクション=高田雅(Allright) アートディレクション・デザイン=齋藤拓実(rough) デザインコーディネート=高田舞(Allright) イラストレーション=ひだかもと 表紙撮影=浅田政志